

見直すという事はやつていたいと思つた。

じゅ業でやつたからでなく自分かもきょう  
みもつて知つて考えていきたいです。」5  
年女子

話し掛け得る現実は在ると思う。「岐路」

（さとう・いつこ／山の手空襲を語りつぐ集い実行委員）

## 過渡期のための共同作業

# 朗読と音楽の集い ——「山の手空襲」 80周年追悼

山本  
唯人

今年の7月13日、港区青南小学校体育館で、「山の手空襲」80周年追悼朗読と音楽の集い（以下、集い）が開催された。集いは2016年から始まつたもので、2020年からコロナ流行のため中断したが、昨年から復活し、今年で6回目を迎えた。アジア太平洋戦争の体験を伝える活動は、いま、過渡期を迎えている。戦争体験を持つ世代が減り、その世代の方たちから、「直接、お話を聞く」という受け継ぎの方法が難しくなった。そうしたなか、今年の集いでは、この「過渡期」を表すような二

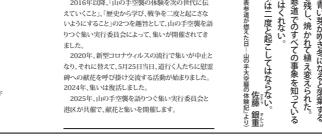
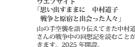
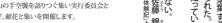
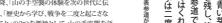
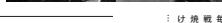
つの変化があつた。

行なうことになり、広報や会場の確保、当日スタッフなどについて、港区の分担・協力を得て運営できた。表参道周辺で港区と並ぶ被災があつた渋谷区とどう連携するか、そもそも、「山の手空襲」とはどの範囲の空襲を指すかなど纖細なテーマを抱えながらも、集いという営みを継続する上で、注目すべき変化の一つと言えるだろう。

第二に、「体験者が話し、非体験者が聞く」という従来のスタイルが、変わってきたことである。集いは毎年、地元で学ぶ学校生徒による体験記の朗読と、体験者のお話という二つのパートを軸にしてきたが、今年は、実行委員・佐藤いつ子さんの台本により、ピアニスト・佐藤麻理さん、ビオラ奏

り、表参道交差点・記念碑前での献血とこの集いの開催について、連携の打診があつた。その後、実行委員会と港区の協議の結果、二つの行事を両者の「共催」によつて行なうことになり、広報や会場の確保、当日スタッフなどについて、港区の分担・協力を得て運営できた。表参道周辺で港区と並ぶ被災があつた渋谷区とどう連携するか、そもそも、「山の手空襲」とはどの範囲の空襲を指すかなど繊細なテーマを抱えながらも、集いとという営みを継続する上で、注目すべき変化の一つと言えるだろう。

者・飯顯さんの音楽と子どもたちの朗読が  
交互に進行し、その節目で体験者が話すと  
いうスタイルになった。前奏の音楽や朗読  
で文脈が示されれば、その分、「聞きやす  
く」はなるかもしれない。しかし、空襲体  
験が「音楽劇の一部」のように聞き流され  
てしまうのは本意ではないだろう。少し不  
安に思いながら本番を迎えたが、いざ聞い  
てみると、意外なほどにマッチして、聞き  
ごたえがあつた。台本と音楽と朗読と体験  
者のお話と――体験した者と体験者から学  
んで伝えようとする者たちとの、絶妙な共  
同作業によって、この「語りつぐ」営みを



成り立たることができたと思つた。

すでに過渡期を歩み始めたわたしたちは、これから、もつと多くの共同と試行錯誤を重ねなければならんだろう。いまどいう時代の風景が垣間見えた、今年の集い（やまもと・ただひと／山の手空襲を語りつぐ集い実行委員）になつたと思う。

（やまもと・ただひと／山の手空襲を語りつぐ集い実行委員）

## 山の手空襲

—聞くことの大切さ

岡本 和子

私は長くこの青山の地に住んでいます。父も祖父も曾祖父も同じ青山に住んでいました。物心ついた頃の青山は穏やかな街では無く、お店はユニオンチャーチやオリエンタルバザー、キディランドが有つた位です。家の庭には柿の木が有り、多くの花々も咲いて、縁の下からグニヤツとしたガラス瓶を見付けるまでは悲惨な戦争のことを知ることも無く過ごして来ました。グニヤリとした空き瓶を見た時、両親から聞いていた戦争の話とガラス瓶が繋がりました。

ガラス瓶がどの位の温度でグニヤリとな

るのか調べた所、1300～1600℃で瓶は熔けるとの事でした。5月25日の空襲では沢山の焼夷弾が落とされ、辺りは1000℃以上の高温になつていたことと思います。家族で戦争の被害にあつたのは、父方の祖父と3人の妹達でした。一番下の妹は逃げている途中で仏壇に位牌を置いて抱えて直ぐに父親達の後を追つたようですが、その姿はどこにも無かつたそうです。叔母は側にいた女人の人と防火用水の水をかけあい、命が助かつたそうです。他の場所に居て助かつた私の父は、家族の遺体を捜して歩き回つたそうですが、どの遺体も真っ黒焦げで誰が誰だか分からぬ状態だつたようです。何年か経つてその辺りを歩いた時、穴は埋められ、何事も無かつたかのようによく家が建ち並んでいたそうです。

大人になつてこの辺りの悲惨な戦争の話を聞くたび、そこに居た人々の恐怖や無念の思いが、自分のことのように感じられるようになりました。会つたことの無い祖父や叔母達の逃げ惑う姿が浮かび、遣り切れない気持ちになります。

祖父は若い頃、海軍の軍人でした。山の手空襲の業火の中で、祖父は何を思つたろうかと考えます。地獄のような猛火の中では、そのようなことを考える余裕など

無かつたかも知れませんが……。戦争が無かつたら祖父や叔母達は生きていて私と会い、どう思いどんな事を言つてくれただろうか考えることがあります。戦争が終わることの無いこの世界を見ていると、心から平和の尊さ大さを感じます。誰にも未来が有り生きる権利が有ります。思い半ば志半ばで亡くなつた人々。戦争はその全てを奪い取つてしまうのです。私の名前は和子と言います。子供の頃「何故私の名前は和子と言うのか」と父に問うたことがあります。父は「戦争が終わり、平和の世の中に生まれた子だから」と答えてくれました。自分の名前に対する意識が変わりました。平和の子で有る私は平和を繋げる人で有りたいと願つてます。

皆が不幸になる戦争は絶対にやつてはいけないものです。

終戦から80年経つた今、ネットが普及し多くの若い人達がその情報を取り込みし、他の人々を攻撃するような言葉を発していふのを聞くたび、私はどう行動したら良いのか悩みます。私は戦争を体験してませんが、体験した人から直に聞いた者として、この悲惨な戦争の話を若い人達にしつかり伝えて行きたいと思うのです。

（やまもと・かずこ／山の手空襲を語りつぐ集い実行委員）